

講義名	異文化コミュニケーション		
科目区分	教養科目		
担当教員	中川 典子		
開講期・曜日・時限	後期 水曜日 2時限	授業形態	
履修開始年次	1年生	単位数	2
		備考	

主題と概要

異文化間コミュニケーションは、1960年代初頭のアメリカ合衆国に始まった分野である。地球規模で文化の多様性が重要視され、多種多様な文化と接触する機会が益々増える現代において必須の学問的、かつ、実践的分野である。本コースの目的は、異文化間コミュニケーションの基本概念を学び、様々な演習活動を実践することで、異文化の背景と価値観、考え方をもち人々との共存を可能とする持続的な異文化間コミュニケーション能力を養うことである。授業は異文化間コミュニケーションの基礎理論に関する講義とグループディスカッションをはじめとする演習活動といった二つのアプローチから行う。

到達目標

本コースでは以下の能力を養うことを目標とする。

- (1) 自己分析力を養い、自文化に対する客観的視野を養う。
- (2) 同一文化圏内に存在する多様性も含め、文化的多様性を尊重する態度を養う。
- (3) 様々な授業内活動を通じて、他者と協力することの重要性を理解し、協調性を養う。
- (4) 他者の意見を傾聴し、尊重することの重要性を学び、他者を理解するための態度を養う。
- (5) クラスで自分の意見を表現できるコミュニケーション力を養う。
- (6) グローバルな視点で物事を考える力を養う。
- (7) 上記を踏まえ、多文化社会で生き抜くための異文化コミュニケーション能力を養う。

提出課題

前もって翌週のグループディスカッションで使用する課題に取り組み、当該授業で提出する。毎回の授業に関する振り返りシートを提出する。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバック

毎回、授業後に振り返りシートの執筆を課す。翌週の授業の最初に匿名で数人の振り返りシートの内容を教員が紹介、コメントし、クラス内で共有する。

評価の基準

- (1) 課題（ジャーナル、その他）（60%）
- (2) 最終レポート試験（30%）
- (3) 授業態度（10%）

履修にあたっての注意・助言他

- (1) コースの評価は、上記の成績評価基準すべての項目を総合して行うが、(1)/(2)のうち一つでも不参加の項目がある場合は不合格となり、単位は与えられない。
- (2) 講師が入室したときに教室にいない場合は遅刻者と見なす。交通機関の延着など、特別な理由がない限り遅刻厳禁。
- (3) 規定の時間以上の遅刻は欠席となる。また、規定回数以上の欠席の場合、単位は取得できないので、各自、自分の状況を把握しておくこと。詳細は第1回目のガイダンスで説明。

*第1回目の授業は授業内容やコース内で遵守すべきルールに関するガイダンス、その他、履修にあたっての重要な注意事項を伝えるため、必ず出席すること。

教科書
.使用しない。

プリント資料及び参考文献

レジメとハンドアウト資料を授業内で配布する。

(参考文献)

- ・L.A.サモラー、R.E.ポーター、N.C.ジェイン(1993)西田司、他訳・異文化コミュニケーション入門 聖文社
- ・八代京子ほか(1998)「異文化トレーニング」、三修社
- ・石井敬ほか(2001)「異文化コミュニケーションの理論」、有斐閣ブックス
- ・古田暁監修(2001)「異文化コミュニケーション-新・国際人への条件」、有斐閣選書
- ・古田映ほか(2001)「異文化コミュニケーション・キーワード」、有斐閣双書
- ・八代京子ほか(2001)「異文化コミュニケーションワークブック」、三修社
- ・久米昭元、長谷川典子(2007)「ケースで学ぶ異文化コミュニケーション」、有斐閣選書

授業計画

回	授業計画
1	ガイダンス：コースの説明とミニ講義
2	コミュニケーションとは(1)
3	コミュニケーションとは(2)
4	コミュニケーションとは(3)
5	コミュニケーションとは(4)
6	文化とは(1)
7	文化とは(2)
8	文化とは(3)
9	知覚とカテゴリー化
10	マスメディアとステレオタイプ(1)
11	マスメディアとステレオタイプ(2)
12	偏見と文化摩擦(1)
13	偏見と文化摩擦(2)
14	文化的価値観(1)
15	文化的価値観(2)

* 毎回の授業内容は進捗状況により、次回に持ち越すことがある。

授業形態（アクティブ・ラーニング）

ア	PBL（課題解決型学習）
<input type="radio"/>	イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
<input type="radio"/>	ウ：ディスカッション、ディベート
<input type="radio"/>	エ：グループワーク
<input type="radio"/>	オ：プレゼンテーション
	カ：実習、フィールドワーク

準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習：翌週のグループ・ディスカッション、および、その他の課題に取り組み、執筆する（約1時間）
復習：その日の授業資料の内容を見直すとともに、講義内容や授業内活動に対する振り返りシートを執筆する（約1時間）

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

双方向授業の実施：グループ・ディスカッションやその他の活動後にグループワークの結果を発表させ、教員がコメントをする。講義の中で、受講生に適宜意見を求める。

実務経験の有無及び活用

備考

このコースは一方向的講義のクラスではないため、受講生の真摯、かつ、積極的な参加を希望する。
第1回目の授業で履修に関する重要な説明をするので、必ず出席すること。